

# 新世紀エヴァンゲリオン ン ～unknown～

魚王かます

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある出来事により、使徒と融合してしまった主人公と、使徒の少女の生きた物語。  
そして、シンジと主人公の行く末は…

# 目次

使徒の、人間

1

底のない、思惑

12



## 使徒の、人間

使徒は、どんな事を考えているのか？そんな疑問を憶えたのは13の時だった。それがわかるのは、すぐだった。

俺は山に来ていた。

家族で登山に出掛けていたのだ。その山はそこまで高いという訳ではなく、遭難する様な場所ではなかった。

しかし、俺は山の中にあつた雑に作られた岩の階段から落ち、足があらぬ方向へと曲がり、打撲により体中に激痛が走っていた。しかし、痛みを感じる時間は長くはなくて、いつの間にか意識を手放した。

---

いつの間にか意識を取り戻すと、落ちた時とは違って周りには夜の帳が降りていた。更に周りを見渡すために立ち上がろうと、体を起こそうと力を入れると全身に激痛が

走る。「づあ……」という呻き声を上げながら、もう一度倒れ込む。

そんな、ボロボロの状態ながらも生存欲だけでどうにか人を見つけるなり、山を出るなりをしようと痛みが走り、様々な症状で弱音を吐く体に鞭を打って這っていく。痛みにより脂汗を大量に流しながら、少しではあるものの地面に這った跡を残しながら進む。

夜目の効かない自分の目には暗闇しか存在せず、恐怖を覚え、諦めかけた時だった。目の前には暗い中に火の明かりの様なゆらゆらとした光があった。

その時、極限状態だった俺はそれを住居の明かりと勘違いし、助かったと思いき死に這っていった。

しかし、そこにあったのは住居ではなく魚の幼体の様な、身体を持った見知らぬ生物であり、さらに先程見ていた光はそれを保護するように存在するわけのわからない発光する液体だった。

自分の勘違いに絶望した。涙を流しそうになるものの、この状況で得体の知れない生物の近くで泣いていられなかった。直ぐに離れて、今まで這って来ていた目的を思い出すと、もう一度出かけた涙を手の甲で拭い進み出そうとした。

だがそんな時、目の前の生物から出てきた触手の様な物体が、身体中に絡みつきその後痛みが走った。

痛みがあつた場所を見ると、触手が身体の中に入り込んでおり、身体に赤い、紅い、赫い、血の色のような根が体を侵食してくる。

嫌だ…！、離れろ！！

そういつて叫んでも変わらず、そして容赦なく体を蝕んでいく。

更に持続して痛みも来て、「助けて!!助けて!!」と大きな叫び声を上げたが、助けることのできる人間はおらず答えは返ってこない。

五分も経つと、身体が乗っ取られる様な感覚に襲われ、意識も薄らいできていた。笑い声が聞こえる。中学生くらいの男女の声だった。楽しそうな声で笑っている。懐かしい、この声が…。急に赤い海と十字架の風景が脳に浮かぶ。

その風景と声が唐突に消えると、先程まで身体に根を生やしていた触手がいつの間にか粉々になり始め、その生物も枯れるように粉々になっていた。

そして、助かったという安堵から疲れが来たのか、意識が薄れていった。

いつの間にか、眠っていたようで寝起きで頭が働かない中、周りを見渡す為に立ち上がり周りを見ると、遠くには街の様な物が見えていた。

さらに、助かるそう思ったと同時に自分になぜ立てたのかという疑問が思い浮かぶ。身体中を見ても、擦り傷やさらには骨折といえる程度では済まないような怪我也、いつの間にか回復していた。

おかしい、そう不安になりながらとりあえず家に帰らなければと思い、街を指し歩き始めた。

人の営みの象徴である家屋から漏れ出た光が近づいていく。ここはどこなのだろう……。自身の居場所などわからないままではあるものの、居場所を確かめて助けてもらうために交番へと向かう。

すると、交番特有の少しばかり近づくのに勇気のいる空気感と、赤いランプが見えた。それを目指して、疲れきって倒れこもうとする意識を無理くり、心の奥底に押し込めて走る。

なんとか、街に着いた後に交番に行き電話を借り、母親に連絡した後すぐに交番の近くに到着しなんとかこと無きを得た。

だが、その後から俺の特異体質が始まった。

たまに、幻聴を聞くようになったり、2 km以上離れた場所まで見えたりし始めてい



た。

しばらく立つと、とんでもない事が起きた。

俺の身体が、何かに乗っ取られさらには性別まで変わった。

身体が、勝手に動き勝手に喋る、そんな奇妙な感覚に落ちいる。

そして、違う人格は母親と父親に話しかけていた。

だが、次にいった一言は衝撃的だった。

「私は、あなた達の息子さんと契を結ばして頂きます」

結婚？の許可をとっていた…。

それから、あいつは俺に話しかける様になって来ていた。

食事を食べている時は。

「やっぱり、感覚の共有っていいね最高だよ…ハアハア」

とセクハラじみた発言をしてきていた。

学校にいる時は。

「そこは、答えがこれであれが、こうでああで」

と思考を共有して教えてきて。

家のダンスには、いつの間にか意識が奪われたのか、女物の洋服が増えていた。

そして、あいつは自分の名前をルシエルと決め、新たに分かったのがルシエルの人格になると、性別が変わってしまうという事。

そんな、不可思議な存在だったあいつが2年経つと日常的にいる者だと、認識し始めた。

だがそれも、長くは続かなかつた。

いつも通りの日の

筈だった。

目の前に、バンが止まり中から体格のいい黒スーツの、男達が現れる。

「え？なんだ？」

『もしかして、想也なんか悪い組織とか入ってたの？』

「いやいや、んなことあるわけない」

『なら、なに？この人達？』

俺にも、ルシエルにも思い当たる節は、無く。

少し、警戒していると目の前の体格のいい人の1人が質問してきた。

「あなた、黄川 想也さんですか？」

「あつ、はい。」

「そうですか、少し一緒に来て頂けますか？」

俺は、急な質問に驚きながらも答えた後、付いてきてほしいと言われ頭の中が？になつていった。

「えつ、なんでですか…？」

「理由は聞かないで頂きたいのですが…」

「来ないというのならば、力づくで連れていくまでですが。」

理由を、聞いた後すぐに男達は俺を抑えつけ、バンの中に押し込み発信する。

暴れはするも、縛られており紐もほどける様子はない。

『どうしよう、やばいのでは!?!』

『あの後、すぐに逃げればよかったのに』

『そう言ったって!』

そんな、小競り合いをする中すこし、ルシエルに対して違和感を覚えた。

いつもなら、俺の身に危険になると無理矢理人格を奪ってでも撃退する筈なのにと。

すこしすると、バンが停車しドアが開けられ、俺は担がれながら運ばれていく。

そして、先程着けられていたアイマスクを取られ、視界が自由になると目の前には、ア  
ニメで見たような司令室が広がっていた。

そして、偉い人らしきバイザーを着け白髪の高鼻の外国入だろうか、そんな老人が  
話しかけてきた。

「キール・ローレンツという、君が黄川想也君か？」

「あつ、そうですけど、俺になんのようですか？」

「君の身体には、使徒が存在している可能性が高いそして君には、今開発している、汎用  
人型決戦兵器エヴァンゲリオンの、開発に協力してもらう。」

よく話しがわからない、エヴァンゲリオン？何でそんなのに乗らないといけないん  
だ。

「とりあえず、俺を家に帰してくれ」

「悪いがそれは出来ない、君もある程度は知っているだろうが、使徒はいつサードインパ  
クトを起こすかわからないのだ。」

「さらに、ここの情報漏らすわけには、いかないんだよ。」

俺は、あの時から俺の人生は変わっていたのかもしれない。

主人公 黄川 想也（きかわ そうや） 15歳

2年前、出掛けた山で行方不明になりさまよっていた所、偶然未成熟であった使徒の幼体を発見してしまい、危険な状態まで身体を浸食されたが幼体の身体が、限界を迎え死亡し助かった。

だが、それ以降多重人格になり、さらには人格が変わると身体の性別まで変わってしまうという、特異体質になってしまう。

さらに、不幸は続きゼーレが開発、研究をしていた『エヴァンゲリオン un』の搭乗者に無理矢理させられてしまう。

搭乗機 『エヴァンゲリオン un』  
ゼーレが開発、研究するエヴァンゲリオン。

今まで、撃破した使徒の残骸などを拘束具に使っており強い拘束になっている。

さらに、両手の平にコアを使い作られた射撃武器を内蔵されており、威力としてはポジットロライフル（スナイパー）並の威力をもつ。

頭部は、初号機に似ており、後頭部から鋭い突起物が生えている。

眼： 双眼（「暴走時」バイザー型）

機体色

拵花色《ますはないろ》

コア：

黄川

ルシエス

：

黄川想也

黄川

ルシエス

？歳

想也の、もう一つの人格で想也に恋愛感情を抱いており、想也と共になる事に執着している。

エヴァのコアの、役割を担っており人格の主権を奪う事で自身も、エヴァを操縦できる（その場合想也がコアの役割を担う）。

性格としては、温和な性格だが本質としては残虐無比であり、目的の邪魔であれば想也以外は殺す。



## 底のない、思惑

七つの板が、あるエヴァと、その搭乗者についての事が、話し合われていた。

『やはり、明らかにになっていないモノを、使うのはどうかと』

6という、数字が描かれた板から、1の板に対して、疑問を投げかける。

『だが、剣や支えるなどの、意味まではわかっているのだ。』

『さらに、「裏死海文書」に記述されてある、時期がすぐ迫っていたのだ。』

1は、疑問に対する、答えを語っていく。

『そうか、だが、その部分は完璧に、解説すべき所ではあるな』

『と、言うことで、後はなにかあるかね？』

1は、会議に参加している、全員に対して、終了を確認する。

『『『異議なし…』』』』

そうして、各々板の明かりが消えていく。

だが、残った2と書かれた者は、静かに呟く。

『裏と翻訳できる、部分もあるがな…』

この「裏」が、彼等のシナリオの、欠損を作り出すモノの、スイッチである事は、誰



も気づいてはいなかった。

戦闘シミュレーターの、準備として、想也とエヴァの、シンクロテストが、行われている。

「シンクロ率、70%。やはり、高いですね」

「ああ、ネルフでは負荷として、限界に近いレベルらしいが」

シンクロ率が、映し出された、モニターを見ながら、実験服を着た男性が、操作を行っている人間と、会話をしていた。

そして、準備が終わり、エヴァの頭にヘルメットの様な、形のシミュレーターが装着される。

すると、目の前にはもう存在しない筈の、『サキエル』が現れる。

「へえ、使徒って、面白い形してんのな？」

『そりゃ、そうよ？私の赤ちゃんの姿みたでしょ？』

「思い出させんな！」

疑問として、思つた事をコアの役目を、担っている、ルシエスに対して質問をしたが、返答は、軽いトラウマになった出来事を、掘り返されただけであつた。

しかし、会話をしている途中、何度か職員のものから、返答が来てしまう事がある。

なぜなら、この会話が出るのは、魂と魂で、接続されているから、出来る事ではあるが、傍からみれば、独り言を言っている様にしか、見えない。

「じゃあ、始ますよ」

「了解」

スタートの、合図と共に握っていた、コントロールレバーを、操作させる。

エヴァは、武器はなく、素手で戦う状態だ。

『サキエル』は、いきなり、仮面の様な顔面の目を光らせ、光線を放つ。

眼前は、光により眩み、白く見える中、左に体を逸らすことで、なんとか、光線を避けた後、自分の体と勘違いしそうな、エヴァを動かし、

急接近したサキエルを、膝蹴りを顔面にいれる。

攻撃により、吹き飛ばされ、座り込む様な体勢になった、サキエルを押さえ付け、手の平のポジットロンショットを、放とうとした時、拘束から抜け出した、右手から光のパイルが、打ち出される。

それが、刺さると全身に、激痛が走る。

だが、初めての時から、シユミレートで受けた、痛みに対して思うのは怒りだった。

その気持ちだが、軽い暴走の引き金となる為、制御のための、バイザーが降りると、想  
也はなんとか、意識を保てる。

しかし、いつもここで、自分の中での、『本能』という、無意識の部屋を覗いてしま  
うのか、理性が失われていく。

「危険です!!、侵食と暴走が始まっています!」

「くっ!、抑えられないか……!」

この、暴走と侵食の同時進行は、コアであるルシエスと、搭乗者の想也が、危機的感  
情を抱いた時に起る反応で、通常ならば、暴走といっても、制御を失うだけだが、こ  
ちは違う。

様々な、現象が絡まり、起るのだ。

まず、コアの状態のルシエスは、一つの大きな感情しか抱けない、それは『独占欲』し  
かも、とびっきりの強さのだ。

そして、ルシエスは、身体でも、心でも、自分以外のなにかの、痕跡を残される事を、  
嫌う為、意識を奪い去ろうと、侵食と暴走を行うのだ。

そこに、バイザーによる制御が、悪く作用して、人間が誰しも持つ、動物的本能が目覚めると、共に僅かに残る理性が、戦闘の知識までも、引き起こす。

さらに、敵味方なく、戦闘知識のあるエヴァが、襲いかかる、簡単に言えば、殺人鬼に武器を持たせ、街に送り出すのと同じなのだ。

シミュレーターの中では、サキエルの腹部は、大きな風穴があき、両腕は垂れ下がり、仮面の様な顔面は、殆ど割れて、血が流れていた。

それでも、悪魔の様なエヴァは止まらず、シミュレーターを壊し視界を、現実の光景へと戻す。

そして、手の平のポジトロンショットを、観察室に向け、最大出力の射撃を放った。

そして、油断していた彼らの居た、観察室は溶けた…。

基地を、破壊したエヴァは、基地の外に出た。

だが、エヴァに乗っていた者は、色素の薄い金色の、肩まで程の髪の女性に、乗り替わっていた。

近かった、4号機のあるアラスカ基地には、裏からゼーレにより、予想外の『エヴァンゲリオン』の、暴走を止めるため、4号機が配備された。

すぐに、4号機の調整を終え、出撃された。

その頃、アラスカ基地に迫っていた、unnはバイザーは、解除されており、なぜか、走り出す体制に、入っていた。

しかし理由は、すぐわかった。

2 km以上先の、4号機が視界に入った瞬間、手足を付いていた、地面を大きく抉り、とんでもないスピードで、走っていく。

そして、勢いを殺さず近付いた、4号機の顔面部分を、右手で掴み掛かり、地面にとつともない勢いで、叩き付ける。

さらに、動く事のない人形となった、4号機を裏返し、コントローラポッドを引き抜き、捨てる。

「異物は、いらぬから排除つと」

「後は、この身体のだけかな、つと」

機体内の、彼女はいつもの、ルシエスではなく、使徒でありながら知恵の実を、手に入れた『ルシファー』であった。

彼女は、腕部分の侵食は完成していた為、手の甲から鋭い、針を生やすと、4号機のコアのある場所をめがけ、突き刺し、針がコアに到達すると、針が三つに別れ、突き刺さる。

さらに、4号機が段々と縮小し、一体化していく、5分も経てば、跡形もなくなった。

「ん、拘束具ごと食べたけど、使えるね」

4号機に満足ようで、満足気にいうと、unの背中から、4号機の顔が現れ、口が開くと、銀色と赤、まさに4号機のカラーリングの、翼が生え、飛び上がる。

「これを、得たのは大きな収穫だね。ゼーレ、私は他の人間と、一体化するのは、望まない」

「望むのは、想也との一体化、ただ一つだよ」

遅れてきた、戦車が射撃をするものの、無傷のunは、4号機の翼で羽ばたき、上空へ舞い上がると、両手ポジットロシヨットを重ね、接続させると、侵食により、威力が小規模のインパクト程になった、それを、接続により、さらに威力を上げると、とてつもない轟音と共に撃った